



# JEG ニュースレター 151号

www.jegschweiz.com

2015年6月23日発行

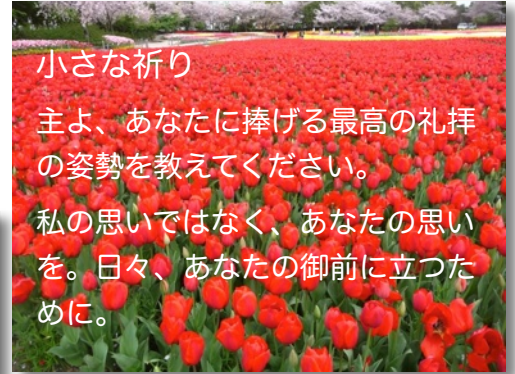
小さな証      スイスJEG修養会      お誕生日おめでとう      SLIM15証しと感想

祖国が最も華やかに  
装う春、久しぶりに  
里帰りした松林兄弟  
が出会った三つの奇  
跡とは、。 P2

6月12日から14日  
まで、シュトゥット  
ガルト近郊で52名  
の兄弟と聖書の学  
びと交わりを持ち  
ました。 P3

日本と日本人を愛し、  
半生を捧げられたク  
ンツ・ルート元宣教師  
が、80歳の誕生日を  
迎えられました。 P3

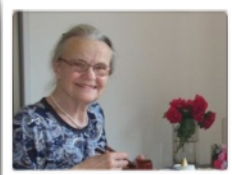
第4回SLIMが北イタリ  
ア・ベルガモ郊外で今  
年も開催されました。  
参加者の証しと感想を  
編纂しました(添付)。



## 小さな祈り

主よ、あなたに捧げる最高の礼拝  
の姿勢を教えてください。

私の思いではなく、あなたの思い  
を。日々、あなたの御前に立つた  
ために。



わがたましいよ。主をほめたたえよ。主のよくしてくださったことを何一つ忘れるな。

詩篇 103:2

ドイツで一番小さな"市" Bad Teinach - Zabelstein

2015年のスイスJEG修養会は、来年  
の"ヨーロッパ・キリスト者の集い"の主  
会場となる南独・シュバルツバルドにあ  
るザーベルシュタインで、52名の参加者  
を得て開催されました。



スイスJEG 修養会 2015

## ちいさな証

## 三つの奇跡

松林幸二郎

スイス日本語福音キリスト教会



この春夫婦で里帰りをしました。私にとっては兄の“四十九日”に出て以来の3年振り、妻にとっては26年振りの日本の春でした。88歳になった母が昨年11月末に带状疱疹にかかり、もう母は長くはないだろうから急いで帰国するようにと友人がしきりに忠告してきました。ちょうど真冬のその頃、私達が住んでいるスイスの古い農家は雪かきや薪暖房で仕事となり、肩を痛めている妻には任せられず、また定年後に週一日だけグループホームの作業所で勤務していた私には、その他に家族に対する責任や教会の奉仕があり、おいそれとは帰国できない状態でした。

## 奇跡その1.

私は、主なる神に導きと母の癒しを祈り続けました。2月になると、母の家の二階に住む叔母や、故郷の友人達の心のこもった励ましや真心をこめて作られた手料理に加え、私達や娘達の祈りが神様に聴かれ、寝たきりであった母が立ち上がり、室内から戸外まで歩けるようになったのです。誠に愛は力で、これらの愛が母に注がれなかったら、自力で立ち上がり歩こうとする気力はきっと萎えていたに違いありません。90歳近い母は、さすがに体力は衰えていましたが、しっかりと両脚で立ち戸口まで出迎えてくれ、気丈夫な姿はそのままでした。もう生きて会う事もないのではと覚悟をしていたので、神様による奇跡を目の当たりにして涙を抑える事ができませんでした。

恵み深い主は更に、時を同じくして友人と日本旅行中の末娘に彼女の大好きな祖母との温泉での一日と、その後の一週間も好天のもと、私たち夫婦と彼女らとの九州旅行を豊かに祝福してくださいました。感謝。

## 奇跡その2.

私達の帰国3日前になって、いつも宿舎を始め様々な配慮をしてくれていた母教会の兄弟からメールが入りました。廉価で交通の便も良く、いつも里帰りの際に定宿にしていたカトリック教会の宿泊施設が、非耐震構造であるため、宿泊客の受け入れを禁止されたとの知らせでした。そこで、広い人脈がある国立大学の教授をしている旧友なら、心当たりがあるだろうと尋ねてみました。しかし、そのように急な話は到底無理で3ヶ月はいるとのことでした。40年前の世界放浪時代なら橋の下で寝る事もいとわなかったけれど、今はそういう訳にもいきません。

しかし、祈りの内に不安は拭かれていき、どんな方法でかは分からないけれど、主は必ず住まいを備えて下さるという確信が与えられ、平安な思いでした。一間きりの母の家でも、いつもはWIFIに繋がったので、津のような田舎町でもウィクリーマンションでもあるのではとスイッチを入れたのですが、全く繋がりませんでした。そこで思いついたのが一軒先のNさんでした。Nさんは兄の中学の同級生で、6年前にスイスの我が家を訪問された時、精一杯のおもてなしをしたのですが、多趣味でお忙しくそれ以来疎遠になっていました。しかし、その日はちょうど外国から戻られたばかりで在宅されていて、一緒に宿泊できそうな場所を探そうとしましたが、どうしてもインターネットに繋がりませんでした。



そうしている間に、Nさんがふっと近くのヨットハーバーのマネージャーをしている友人を思い出したのです。この方は母の家から歩いて数分のところに2軒家を持っているので尋ねてみると、どうか自由に使って下さいという信じられないようなお返事でした。ここで2度目の奇跡を見せて頂きました。それから2週間、午前と午後、歩いて数分のところに滞在し、母を訪ねる幸いを得ました。共に歩いて近くのレストランに食事に出掛ける事も出来、寝たきりの母を病院に見舞うことも覚悟していた私は、イエス様に幾度感謝したことでしょう。

## 奇跡その3.

主は母の周りに、毎日二度、散歩がてら様子を診に来てくれる家庭医と、週に二度、母と叔母を訪れるマッサージ師の友人を備えて下さいました。遠く離れて欧州に住み、すぐには帰れぬ、帰ったところで余り役に立つとは思えぬ私にとって、それは感謝なことでしたが、これから更に老いゆく母にどうすれば良いのか、解決策を見出すことができずにいました。

私達が奥多摩にいる田辺先生ご夫妻を訪ね旧交を温めていた頃、重い糖尿病の兄を長年看護してきた義姉が母と叔母を訪ねていました。義姉は兄の死後、グループホームで介護士として働いていたのを辞めて、立川から母と叔母の近くに引っ越し、二人の老後を見る決心をしてくれたのです。これも私にとっては奇跡としか思えませんでした。一ヶ月という短期間に、私達は3度の奇跡を体験させられ、愛をお示し下さった主なる神様に更なる深い信頼と感謝を持って歩みたいと願う日々です。

「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」

マタイ 6:33



1、スイスJEGは5月24日、ペンテコステ伝道礼拝を持ちました。ペンテコステは、聖書が明確に語るように、イエス・キリストが人類の罪と咎を負い、父なる神の御心に従い十字架の上で

“実を結ぶため”（スイスJEGの年間目標聖句・ヨハネ15:16から）をテーマにした修養会には、他教会からも7名が参加され、総勢52名の兄弟姉妹と子ども達が、緑豊かな美しい自然環境の中で、みことばの学びと貴重な交わりのときを持ち祝福されました。修養会におけるマイヤー・マルチン牧師の講演ならびに説教はスイスJEGのHPで日独両国語でお聞き頂けます。また、修養会の記録ビデオはこちらでご覧頂けます。[www.youtube.com/watch?v=Dq0bR\\_EkV4&feature=youtu.be](http://www.youtube.com/watch?v=Dq0bR_EkV4&feature=youtu.be)

壮絶な死を遂げて、3日目に復活され、人々の前に現れたという歴史的事実から50日後に弟子のうえに聖霊が神から下り、イエスが処刑されたとき、恐怖で散り散りになって逃げ隠れした弟子達（私たちと同じように弱虫であったわけです。）が迫害と殉教をも恐れず世界中に福音（良き知らせ）を伝えに出たのは、この聖霊によるものです。教会が誕生したのもこの日です。

マイヤー牧師は、この伝道集会に“セカンドチャンス”をテーマにヨハネ8章1-11節から罪と律法、そして恵みにいたるプロセスを分かり易く解き明かされました。メッセージに先立って、このテーマに因みユースグループによってスキット“姦淫の女と律法学者”が演じられました。<https://www.youtube.com/watch?v=MsMhjkurew0>これはビデオでもご覧頂けます。また、左上のチラシもユースの手によって制作されました。



2、5月10日の礼拝の“使徒の働き”講解メッセージにおいては、マイヤー牧師は“語り続ける証し”をテーマに、使徒たちの果敢な働きの中から現代への適用を学びました。なお、上記2つのメッセージは、スイスJEGのメッセージ・サイトで日独両語でお聴き頂けます。<http://jeg.meielisalp.ch/>



また、愛餐会のなかで、新しい任地・奥多摩“福音の家”で働きを始めた田辺正隆牧師ご夫妻、およびスイスJEGの支援する宮城県オアシスチャペル利府キリスト教会の菊地祥彦神学生からのビデオメッセージと、この春、奥多摩を初め日本各地で撮影された“日本の春”が上映されました。このビデオはこちら

らでご覧頂けます。  
日本からのメッセージ [www.youtube.com/watch?v=-VrnqRdLy8A](http://www.youtube.com/watch?v=-VrnqRdLy8A)  
日本の春 <http://www.youtube.com/watch?v=Tg63dle7lAs>

3、スイス日本語福音キリスト教会の修養会が、来年の第33回ヨーロッパ・キリスト者の集いの会場となる南ドイツ・シュバルツバルト（黒い森）にある温泉地バードタイナッハ/ザーヴェルシュタインのハウス・フェルゼンgrund.de/startseite/ において6月12日から14日まで開催されました。



4、スイスJEGでは、次世代育成を視野にいれ、今年も菊地神学生を祈りと献金をもって支援を継続するとともに、日本への若い世代の宣教師家族二組を支援します。また、若い世代に聖書の学びと生きたネットワーク構築を促すためSLIM参加の学生（今年は3人）には参加費の全額、修養会、セミナー、キリスト者の集いへの参加する学生と子どもには参加費の半額を補助することにしました。これは、同時に家庭への負担を軽減し、家族全員が救われる事を願った一つの施策ともいえます。

5、日本滞在中のクンツ・ルート元宣教師は、故アルトゥール師と33年に渡ってお働きになった第二の故郷・日本で5月16日、次女タビタさんご家族、長女プリシキア宣教師、日本駐在中の長男レネさん、そして、予告せずバーゼルから駆けつけた次男マルコさんに囲まれて80歳の誕生日を迎えられました。心からおめでとうございます！クンツ師は誕生日祝いに温泉旅行と、宣教師として初年を過ごされた石岡への小旅行をプレゼントされました。



6、第23回「聖書のお話を聴く会」が6月26日、金曜日15時から（時間と場所が変更：ストラスブル近現代美術館 Musée d'Art Moderne et Contemporain 1, place Hans Jean Arp, 67000 Strasbourg）**ストラスブルの生んだ画家、ギュスターヴ・ドレ Gustave Doré** をテーマに講師に内村伸之先生（ミラノ賛美教会牧師）を迎えて開催されます。お問い合わせは今村兄まで [yimamura1019@gmail.com](mailto:yimamura1019@gmail.com)

7、今年で4度目となるSLIM15は、4月9日(木)から12日(日)まで北イタリアの（炭酸水で有名な）サンペレグリーノで開催されました。カンファレンスには16か国から延べ95名の兄弟姉妹がに集いました。祈りと与えられたテーマは「聖書が与える同じ思い」（ローマ15：4-6）、そして特別講師としてミュンヘン日本語キリスト教会の安藤廣之先生とハーベスト・タイム・ミニストリーズの中川健一先生をお迎えしました。写真や講演動画、およびアンケート結果は以下のfacebookページに投稿されていますので是非ご覧ください。<http://www.facebook.com/slimconference>

8、オーニング宣教師、クンツ・プリシキア宣教師、ラシェンコ・ベラ宣教師、マルティン・フィリップ祐子宣教師からの Rundbrief、工藤篤子メルマガ、井野葉由美メルマガ号、バルセロナ日本語で聖書を読む会月報、デュッセルドルフ日本語キリスト教会月報、ケルン・ボン日本語キリスト教会月報、ルーマニア川井牧師の週報、ブリュッセル・ミサ便り、パリ・プロテスタント日本語キリスト教会パルタージュ、イザール通信、夜越山からの便り、ミッション“宣教の声”、ローゼンクランツNL、ピヒカラ宣教師帰国のメッセージと挨拶が届いています。お読みになりたい方は、松林までご連絡ください。



日出ずる国から

## 陶芸の里でリトリート

滋賀県は信楽キリスト教会の  
ウィリアムズ・富由姫牧師から



3月20日から22日まで帰国者リトリート滋賀が、信楽キリスト教会で持たれました。今年の集いは、信楽キリスト教会の信徒の人達、草津の帰国者の分かち合いの人達、関東・関西・四国・滋賀の帰国者と連絡を取り合いながら準備が出来たことでした。特に帰国者の方々と定期的にskypeで連絡しながら集いの準備をしていたことでした。祈り、話し合い、進めていけました。

約70名の参加で、メッセンジャー、横山基生師、ウィリアムズティモシー師、ウィリアムズ富由姫師によりメッセージが語られ、分かち合い会、5名のトーキングパートナーを通して個人的に話せる時間もありません。



讚美（吉村美穂さん）、証し会、ギター演奏（長佑樹さん）、自由時間のオプションには、信楽高原鉄道乗車、陶芸の村観光、陶器作りなどありました。子どもたちも元気いっぱいに讚美し、遊んで楽しんでいました。集いを通して、献身を考えていた方が、献身の考えが甘かつ

たことや、靈的に新しくされたいという方々も多くありました。

集いの後、素晴らしいことが起きたのは、帰国者が自発的に聖書研究会を始められたり、分かち会を持ち始められたことです。毎月草津で帰国者の分かち合い会が持たれていますが、新しい方々も加えて下さっています。



また、リトリート滋賀から2週間後の4月11日、陶芸家でもあるウィリアムズ・スティーブン牧師の陶芸とスイス教会の松林幸二郎兄による陶芸／リトグラフ二人展が、やはり信楽において開催されました。

信楽在住の英国人牧師の陶芸作品と、スイス在住38年の日本人リトグラフ画家の描く繊細なスイスの風景画の異色コラボとして話題を呼び、近県からも多くの訪問者を迎えました。また、展覧会を機に、多くの地元民と知り合う事ができ、英会話教室に来る子どもが倍増しました。よき福音の種蒔きに、主がこの企画を用いて下さったことに感謝です。

信楽二人展のオープニングパーティーの様子です。[www.youtube.com/watch?v=O1ck0IGF0rw](http://www.youtube.com/watch?v=O1ck0IGF0rw) (5分)

## 矢吹博・育代師派遣式・ 壮行祈祷会レポート

愛知県は春日井福音自由教会の  
伊藤政人兄から



矢吹師ご夫妻の渡欧を3日後に控えた2015年6月13日（土）。行田カベナント教会にて派遣式と祈祷会が開かれました。「先生をフランクフルト・ヨーロッパへ送り出すのに派遣母体が無くては力強い支援ができない」というので作られた「矢吹博・育代宣教師を支える会」とその中心となって下さる「行田カベナント教会」の主催で行われた式が、聖霊の御臨在を感じる前奏によって始まりまし

た。

小山田先生のユーモアあふれる司式に少し心と励まし、励ましの言葉、ご夫妻

の証し、派遣挨拶、聖書朗読、み言葉の取り次ぎと続くにつれて、いよいよ主が矢吹先生ご夫妻をして主の業を進める為に遣わして下さいという緊張感と確信に導かれて行きました。

周りの人と心をあわせて祈るように導かれた壮行祈祷会は、本当に主が祈りの主となって下さり、心を注ぎ出してご夫妻の為、フランクフルトの為、欧州の為に祈りが導かれました。

（矢吹先生  
司式：カベナント教会  
（矢吹師出身教会）小山田格牧師のお兄さんの）矢吹徹先生による閉会の祈りは、私が今まで頂いた祝福の中でも最も祝されたお祈りでした。必ずや主がご夫妻を通してフランクフルトや欧州にてその御業を余すところなく展開して下さいる信仰を与えられるときとなりました。

今頃はご夫妻がフランクフルト空港に降り立たれる頃でしょうか。主が健康と生活も祝して下さいるように祈りつつレポート申し上げます。



送り出して下さる行田カベナント教会を会場に開かれた派遣祈祷会

追記：もうじき矢吹先生ご夫妻がFfm空港に到着される頃かと想像しております。いよいよ主のお働きが始まるとワクワクしております。又、そちらの様子もお知らせください。

さて、今から田んぼに出て、10日前に済ませた田植えの跡を確認しつつ補植（欠けているところへ苗を1本植えること）をしていきましょう。主からの恵みの実りを想像しつつ働かせていただくのは嬉しいものですね。

いのちの授業

東京はブルーリボンの祈り会の  
岩崎建男兄から

スイス日本語教会の愛する兄弟姉妹へ

いつも横田めぐみさんはじめ北朝鮮に拉致されて35年以上も帰国を果たせぬ同胞や、肉親の帰国を待ちわびる親族のためにお祈り下さり心から感謝しております。



去る5月21日にお茶の水クリスチャンセンターで「横田早紀江姉を囲む緊急拡大祈禱会」が開催されました。その終わりに、横田さんご夫妻が各地の中学校で行われた講演会での交流や、生徒達の応答を収録したものが紹介されました。皆様に是非ともお読み頂けるよう、この本を貴教会に送らせていただきます。特に中学生や若い方に読んで頂けることを願っています。

この「いのちの授業」は先に贈られた横田早紀江著「愛はあきらめない」とともにスイスJEG文庫に収められています。



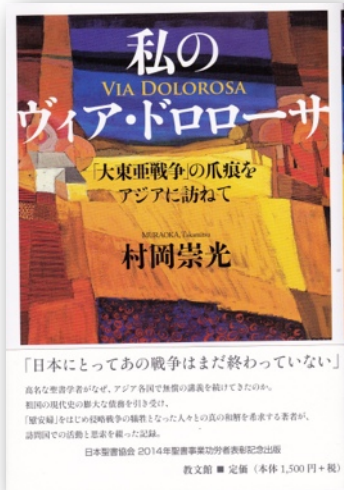
私のヴィア・ドロローサ

オランダ日本語聖書教会の  
村岡崇光兄より



このニュースレターの読者の方の中にはご存知の方もいるかもしれませんが、私は2003

年にオランダのライデン大学の教授職を定年で辞して以来、毎年、妻の桂子を同伴して、アジア諸国を訪ね、専門のヘブライ語やギリシャ語を現地の大学や神学校で教えさせてもらってきました。その記録が昨年12月に日本聖書協会：教文館より「私のヴィア・ドロローサ：『大東亜戦争』の爪痕をアジアに訪ねて」として出版されました。A6版、200頁ちょっと、1500円+税です。



退職してからどうやって過ごそうか、と真剣に祈り求めました。辿り着いた結論は、神様から生かされて、30年余りもイギリス、オーストラリア、オランダで好きな語学の研究、教授にあたらせてもらい、これからも研究を続けたいのはやまやまだけれど、究極的には神様から頂いている収入の最低十分の一を神様のお仕事のために献金させてもらって来たように、退職の時間も十分の一神様のための直接の仕事のために捧げよう、ということでした。「ヴィア・ドロローサ」は「悲しみの道」を意味するラテン語で、十字架の死を宣告されて、主イエスが自らの十字架を背負ってカルバリを目指して歩かれた道筋のことです。

上記の三つの国のいずれでも、日本がはじめた大東亜戦争の傷跡がまだ疼いていることに気づき、直接の戦場となったアジアにはその傷跡がもっと生々しい形で放置されており、朝鮮半島や台湾の場合は、大東亜戦争以前から日本の植民地として日本は甚大な被害を及ぼして来て、その後始末がほとんど出来ておらず、そればかりか、日本の政治家の中にはその生傷に塩をすり込むような発言を平然とするような人が未だに絶えないことに、外国に半世紀以上住んでいる者として堪え難いものがあります。ごく最近、訪米さきで安倍首相が所謂「慰安

婦」のことを「人身売買の犠牲者」と表現したのがその一例です。

戦前の日本の教会、クリスチャンはほんの一握りの例外を別として、当時の国策を支持し、礼拝では君が代が歌われました。中国だけでも二千万人の死者を出した、とされています。他国の領土を侵略し、資源を略奪し、人を殺傷する、これは「神にかたどって造られた人間」（ヤコブ3：9）に対して犯された罪に他なりません。罪を神様の前にきちんと処理するのは聖書の教えの基本ではないでしょうか。

私は、日本国籍を放棄しない限り、この祖国の過去の歴史に対して責任がある、と信じます。7歳で敗戦を迎えた私に戦前の祖国の行為に対して直接の責任はありません。しかし、日本人であり続ける私にとって、日本の歴史は私の歴史です。今なお戦争責任を放置している日本に対して私は責任の一端を担います。そういった認識に立って、一年の十分の一、すなわち最低5週間、旅費も自前、場合によっては滞在費も自前で、無償で講義をさせてもらってきました。



敗戦から70年を迎えるこの年、日本人クリスチャンは預言者的姿勢で、祖国が心底から悔い改め、謝罪し、被害者に適切な補償をするように、「反省」などという分かったような分からないような表現でごまかさず、具体的な行動に立ち上がるべきではないか、と思います。さもなければ、今度は、愛する祖国は、福島原発被害ぐらいでは済まない、未曾有の被害に見舞われ、日本列島は太平洋の藻くずとして消え去るのではないかと危惧します。

拙著は、以上のような視点からアジアの人たちと私たちが過去11年間どのように接して来たかの記録です。

この本についてのお問い合わせ、ならびにご注文は：[muraoka@planet.nl](mailto:muraoka@planet.nl)へ。  
なお「著者には本書の印税は一切支払われません」